

金曜日の夜。付き合つて五ヶ月ちよつと。お泊まりは今日で四回目。

そろそろ何かあつてもおかしくない。大好きな人と、キス以上の関係になりたい。私の頭は、えっちな妄想でいっぱいだった。

「明梨ちゃん？ もうちよつとかかるー？」

「いま歯みがきしてるところー！ なにかあつたー？」

「大丈夫だよー、終わつたら来てねーゆっくりでいいからー」

ゆっくりでいいから。悶々としていたことを言い当てられたようでぎくりとする。

私にだって、それなりの性欲とか、好奇心はあつて。焦つてゐるつもりはないけれど――

湊さんは、同じ部署の先輩社員で、奥手な私の初めての彼氏だ。

「絶対に怖がらせたりしない。嫌なことも、不安になることも、絶対しないって約束する。少しずつ、ゆっくりでいいから――俺と恋人になりませんか？」

告白してくれた時に約束してくれた通り、私たちはほんとうに「ゆっくり」と恋を進めている。手のつなぎ方は最近ようやく恋人繋ぎに進化した。キスは、まだ一瞬触れるだけ。彼の家に泊まって、ぴったり寄り添って眠っても、それ以上のことが起こる気配はまったくない。

（だったら、今日は、ちょっと私から責めてみちやおうかな……？）

湊人さんと一緒にいると、私はどんどんえっちになる。

優しいキスも大好きだけど、舌を絡め合う大人のキスもしてみたい。

じゃれあいみたいなスキンシップから一歩先に進んで、いつもこっそり自分で触っている場所に触れてみて欲しい。

（初体験は痛くて当たり前って、インターネットに載っていたけど……オナニーで慣れてるし、湊人さんならきつと優しくしてくれるはず……）

えっちな漫画や小説に出てくるカップルは、とっても気持ちよさそうで、幸せそう。私も湊人さんと、同じことをしてみたい。

かわいい部屋着も、とっておきの勝負下着も。心の準備だってできている。恋が怖いなんて、もうずっと前から思っていなかった。

リビングに戻ると、湊人さんはブランケットにくるまってスマホを見ていた。

肩を並べて腰かけた私に、湊人さんは自然な動作でブランケットを共有しながら「明日ここ行かない？」とスマホの画面を見せてくれる。

そこには真っ白なブラータチーズがどんと乗ったサラダの写真がうつっていて。先程までもくもくといやらしい妄想で頭をいっぱいにしていた私には、その純白がまぶしすぎて、胸がちくりと痛んだ。

スマホを覗き込みながら、思いきって体を寄せる。私と胸が湊人さんの腕にちゃんと触れたけど「同じ建物に映画館もあるんだって」と微笑まれて、ちよつと肩透かし。

（当たってること、気づいてないのかな？ 私の胸じゃ足りないってこと？）

離れるのも悔しくて体重をかけたけど、湊さんはびくともしない。今はカーディガンで隠されているけど、実は結構しっかり筋肉があるんだよね。夏にデートした時のＴシャツ姿、ドキドキしたな。

（もし、このままソファに押し倒されちゃったらどうしよう……）

湊さんの体を意識すると、少しずつそわそわと気持ちが落ち着かなくなってくる。「ごめんね。俺、もう我慢できない」なんて無理やりキスされちゃったりとか……!?

「大丈夫？ ちょっと疲れちゃった？」

「わ！ ご、ごめん！ なんかちょっとぼんやりしちゃって……」

「今日もお仕事いっぱい頑張ってたもんね。もうお布団行こう」

湊さんが先に立ち上がり、私の手をとって軽く引き上げてくれる。そのまま何の迷いもなく寝室へ向かう流れに、きつと今夜も「そういうこと」はないんだろうなと悟ってしまった。

せつかくの勝負下着だけど、今夜も出番なしかあ……思わずため息が漏れそうになるのをぐつとこらえる。これ以上心配をかけたなら、優しい彼は明日のデートも中止にしかねない。

お布団に到着しておやすみなさいを言い合ったあと、「キスしてもいい？」と湊さんが顔を近づけてきた。

もう唇を触れ合わせることにまだいぶ慣れてきたのに、湊さんは毎回ちゃんとキスの前に「いい？」って訊いてくれる。

私がこくと頷くと、唇がそつと重ねられて、すぐに離れていく。齒磨き粉のミントの香りが残る、おまじないみたいによさしいキス。

「おやすみなさい、いい夢見てね」

幸せだ。大人になってからの恋で、こんなふう ゆっくり丁寧に関係を深められることなんて、
そうそうあるものじゃないと思う。

そつと身体を寄せて、湊さんの胸元に顔をうずめる。パジャマ越しに伝わる鼓動は、ゆっくり、静かに、心地よく響いていた。

「どうしたの？ 今日甘えんぼさんの気分？」

「うん……そうかも……」

髪を撫でてくれる彼の手が優しく、思わず目を細める。だけど、これだけじゃ足りない。満たされているのに、ますます欲しくなってしまう。私って、こんなに欲張りだったんだ……

「湊さん……だいすき……」

衝動に背中を押されるように、顔を上げて唇を重ねる。私からキスをするのも、「いいですか」「いいですよ」のやりとりをしないのも、これが初めてだった。

「うん——俺も大好きだよ」

理性が静かにほどけていく。「大好き」と「もっとしたい」の気持ちを伝えるように、角度を変えて何度もついばむように口づけると、湊さんが背中の手を回して抱きしめてくれた。

ちゅ、ちゅ……ちゅっ……ちゅ♡

唇を貪り続けていると、おへその下あたりに熱を帯びた何かが触れた。

柔らかな布越しでもわかる、硬くてはつきりした存在感のある感触の正体がわからないほど、私は子どもじゃない。

（おちんちんだ……♡　こんなに硬いってことは、湊人さんも、私とキスして興奮してくれてるんだよね……？　えっち、したいってことだよね……！）

そう意識した瞬間、嬉しさと興奮で、体の奥がじんとうずいた。私は身をよじって、彼の赤ちゃんに自分の下腹部をすり……♡ と誘うように擦り付ける。すると。

「——だめだよ、明梨ちゃん」

湊人さんは私の肩に手を添え、そっと距離をとるように体を引いた。

「今日はどう寝よう、いい子だから、ね？」

困ったような声色に、そっと引かれた境界線みたいな気配を感じる。やんわりと、だけどはつきり拒まれたショックで、頭の中が真っ白になる。その途端、自分の声とは思えないほど、震えた声が口から飛び出てきた。

「……私に、魅力がないから？ わ、私に魅力がなくてから、興奮しないから……だから、えっちなことしてくれないの？」

悪いのは、勝手に盛り上がって、勘違いした私の方なのに。

ずっと胸に溜まっていた気持ちを言葉にした瞬間、涙がぶわっとこみ上げてくる。

「違う、違うよ、明梨ちゃん……!」

湊さんは、ぐっと私を抱き寄せた。胸元に当たる彼の鼓動がさっきよりずっと速い。

「したくないわけじゃないよ。俺だって男だよ？ 興奮しないなんて、そんなことありえない——俺、明梨ちゃんのこと、ものすごくえっちな目で見てるから」

「うそ……」

「ほんとだよ。お風呂上がりシャンプーの香りとか、くっついたときに胸が当たるのとか、ニコニコ笑いながら俺の名前呼んでくれるのとか……一緒にいるだけで中学生みたいに反応しちゃうから、俺、いつも毛布で隠してて……ああ、こんなこと言うつもりなかったのに……」

私を抱き寄せる腕が、ぎゅっと強くなる。湊さんは自分に言い聞かせるように言葉が続ける。

「俺、本当に、明梨ちゃんのこと大事にしたいんだ。怖がらせたくないし、後悔させたくない」

——だから、これまで通り、ゆっくりでいいんじゃない？

まっすぐで、優しい言葉の中に、隠しきれないほどの熱が宿っている。

私を大切にしてくれようとする気持ちと、欲しくてたまらない気持ち。きつとどちらも、湊さんの本当の気持ちなんだ。だからこそ……

「ねえ——ゆっくりって、いつ？」

だからこそ、うれしくて、愛おしくて、どうしようもないほど湊さんが欲しくなった。

「……っ、それは——」

「大事にしてくれるなら、私のおねがい聞いて……ねえ、わたし、湊さんってっちしたい……」

湊人さんの喉がゴクンと動く。

感情を整えるように深く息を吐くと、そして熱を宿した瞳でゆっくりと私を見つめ返す。

「本当に、いいの？」

「うん……うん……♡」

「俺、結構……その、ちょっと、えっち、だから、びっくりさせちゃったらごめんね」

「わ、わたしも……すぐくえっちだから、大丈夫！」

湊人さんの目が驚いたように見開かれて、次の瞬間、愛おしげに細められる。

そっと手を握られる。握り返すと、大きな手がきゅっと優しく包み込んでくれた。

「明梨ちゃんのこと、ちゃんと大切にする。怖がらせることは絶対しない。だから——今から、抱いてもいいですか？」

「……！ はい……お願いします……♡」

体中から溢れだす喜びを伝えたくて、首に手を回してぎゅっとしがみつくと、湊さんは応えるように抱きしめ返してくれた。

「そんなに俺としたかったんだ……♡　もしかしてずっと我慢してた？」

「してたぁ……♡　今日えっちするのになって、おとまりのたびにおもってたぁ……♡」
「かわいい……♡　俺もね、本当はずっと——したかったよ」

唇に触れるか触れないか、キスの延長みたいな距離で囁かれる。

湊さんもうずっと、私とえっちしたかったんだ。その事実が嬉しくて、胸の鼓動がどんどん速くなった。

ちゅっ……♡　ちゅぷぷっ……ちゅるっ……♡　じゅるる……♡

「ひゃっ……♡　あっ、あぁっ♡　やぁ……っ♡」

「……こーこ、すっごくいい反応するね……♡　お耳も好きなんだ？」

いつもみたいに「キスしてもいい？」と聞かれて、「確認しなくても好きにしていいいよ」と余裕ぶって答えてしまった。私は、キスだけでとろとろにされている。

湊さんの舌は、今は耳を責めている。その前は、おでこ、まぶた、鼻先、喉、鎖骨のくぼみ、首筋、他にもたくさん色んな場所にキスをされた。

（好きにしていいいよ、とは言ったけど……こんなに、容赦なく舐められるなんて、思ってた……！　「俺、ちよつとえっちだから」なんて嘘……！　えっちすぎるよ……！）

濡れた舌が耳のふちをなぞって、ぬるん……♡　と裏に潜り込む。ふうーっ♡　と強く吹きかけられる息が火照ったところを直撃して、くすぐったくて恥ずかしい。

「お耳、かわいいー……ずっと舐めたくなっちゃう」

ちゅっ、くちゅくちゅ……♡ れろ♡ ペろペろ……♡

舌が耳の穴の中をくすぐるたび、くちゅくちゅ、って水音が脳に響いてくる。そんなはずがないのに、鼓膜まで舐められているような気がして、頭がぼーっとする……♡

「あ、ああ……♡♡ や……おみみ……♡ きもちよすぎ、るからあ……♡♡」

「きもちいい？ よかったあ♡ 気に入ってくれて嬉しい。ずーっと……こんな風にしたかったから……」

いっぱい舐められて、熱くて、耳が溶けちゃいそう。湊さんのTシャツにしがみついてなきや、頭も一緒にとろけそうになる……♡

「ふふ、すごくえっちな顔してる」

「ええ……♡ あう……そうなお……？」

「うん、とってもえっち。唇からよだれが垂れてうるうるしてて、目は泣いちゃうの我慢してま
すうってくらいとろとろで……俺、がっつきたくなっちゃった」

湊さんの舌が、ゆっくりと私の口の中に差し込まれる。

唇の端、舌の表面、ほっぺの内側——私の気持ちのいい場所、全部見つかった……♡

ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ、じゅるっ……♡

口の中から響くいやらしい水音を聞いているうちに、自分の舌が今どこにあって、なにをされて
いるのかだんだんわからなくなる。

湊さんの舌が、上顎のざらついたところをゆっくり撫で上げる。ざりっざりっ……♡ と舌
の先でこすり上げられると、頭の中までビリッと突き抜けるくらい気持ちよかった。

「かわいいね、キスだけでこんなに気持ちよくなれるんだ」

「んんっ……♡ ふぁ、あぁ♡ なに、これえ♡♡」

「このざらざらしたところ、きもちーでしょ？　ここね、おくちの中の一番いいところなんだよ。気に入った？　俺とのキス、好き？」

「あっ♡　すぎ、すきい……♡　きす、すきい……♡♡」

「よかったあ♡　じゃあ、もっとしてあげる。かわいいおくち、いっぱい気持ちよくなってるね」

ちゅるるっ♡　にゅるんっ♡　くちゅ、くちゅ、ちゅっ、ちゅぱっ……♡

再び差し込まれた舌で、「もっとしてあげる」の宣言通りに、湊さんは私の口の中を支配していく。

じゅぷじゅぷと泡立った唾液を吸り取るみたいに、いやらしい音を何度も響かせて、私の舌をぐりぐり絡め取ってくる。

（キスって、こんなにきもちいいんだ……頭、ふわふわしてきた……）

ただされるがまま、くちゅくちゅ音を立てて、体の奥がきゅうって疼いていく。私の口、湊さんに食べられちゃってるみたい……♡

「……ねえ、気づいてる？ さっきからずっと、腰、動いてるよ」

「へ…………？ えっ、うそ…………♡ あっ！ やだあっ！」

「かわいい…………♡ やっぱり無意識でやってるんだ。それって一番、えっちじゃない？」

意識がぐらりと現実に戻される。下を見ると、いつの間にかルームワンピースの裾がおへそまでまくれあがっていた。少し身体を引けば、きっとおへそも、太ももも、下着も、何もかも全部が見えちゃう。

それだけでも恥ずかしいのに、私は湊人さんの太ももに片脚を載せて、女の子の一番恥ずかしいところ——おまんこを湊人さんのカチカチに硬くなったおちんちんに擦り寄せていた。

「やっ、ごめっ、ちがう、わたし、そ、そんなつもりじゃ…………っ！ごめんなさいっ！」

「謝らなくても大丈夫。もつと見せて？ 気持ちよくなりたくて、頑張っへこへこお♡ っしてしてるの、すっごくかわいい…………♡」

「だめっ♡ あっ♡ へこへこみないでえ♡」

へこへこへこへこお♡　ぐりぐりいつ♡

どうにかなってしまいそうなくらい恥ずかしいのに、おまんこが快楽を求めて勝手に揺れてしまう。

「やだあ！　とめるのお！　とまってえ♡　あっ♡　がまんしなきゃ♡　やあああ♡」

「うん、うん♡　へこへこやめたいのに我慢できないの、困っちゃうね」

「やあっ♡　あっ♡　だめっ♡　いやあああ♡」

「俺がちゃんと止めるお手伝いしてあげるから、安心してね」

湊さんの両腕が私の背中をぎゅうっと抱きしめると、ようやく腰が跳ね回るのを止めた。

よかった、これでもう情けないところを見られなくて済む……ほっとして顔を上げると、得意げな笑顔と目が合う。

「ね？　もう動かさないでしょ？」

「ん……うんっ……♡あっ、でもおっ……♡ ああっ♡ みなとさんっ♡ あのねっ……♡」
「大丈夫、ちゃんとぎゅーってして、押さえてあげてからね……♡」

まずい。おまんこが、湊人さんのおちんちにぎゅうぎゅうと押しつけられている。

私も湊人さんもまったく動いていないのに、圧迫感だけでおまんこがそわそわする……♡

「あ、なんかあ♡ なんか、へん♡ きもちいの、なくならない……っ♡」

「あれ、まだ力足りない？ ごめんね、もっとしっかり押さえるね？」

湊人さんが腕の力を強めると、おちんちんがぐりぐりいっ♡ 割れ目に食い込んでくる。

腰を浮かせようとしても、湊人さんの腕はまったく動かない。それどころか逃げようとした私を咎めるかのようにますます強く押さえつけられて、どんどん気持ちよくなっちゃう♡。

「んー？ 動いてないのに気持ちいいの？」

「あっ……♡♡ や、やあ……っ、みなとさんがぐいっしてするからあ……っ♡♡ んっ♡」

「え、押さえちゃだめだった？ ごめん、じゃあ離すね」

ふっと、湊さんの腕の力が抜けると同時に、私の腰がびくんと浮いた。

覚えたばかりの強い快楽を確かめるように、腰をめちやくちやくねらせておちんちんに何度何度も擦りつけてしまう。

へこへこへこへこへこへこへこおっ♡♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりいっ♡♡♡♡♡♡

「あうっ♡ んっ♡ へこへこだめえっ♡ とまってえ♡ あっ♡ あああっ♡ おさえ
てえ♡♡♡ みなとさんっ♡ みにゃとさんっ♡ おまんこたすけてえっ♡♡♡ あたまばか
になうっ♡♡」

「ふふっ『みにゃとさうん♡ おまんこたすけてえ♡』なの？ かわいいー♡ いいよ。なっ
てもいいよ。バカになっちゃうくらい、おまんこ気持ちよくなろうね」

湊さんが再び腰に手を添える。今度はさつきみたいに動きを封じるためじゃなくて、私を逃がさないため。もっと気持ちよくするための手だ……♡

「俺も、明梨ちゃんにちんぽぐりぐりされてるの、すっごく気持ちいいよ……♡ 今すぐ挿れて、ぱんっぱんっぱんっ♡ ぐりぐりいっ♡ って、腰振りたくなってきた……♡」

うっとりした瞳の湊さんが私を固定したまま、ずん……♡ ずん……♡ 腰を揺らす。頭がくらくらする。こんなの、もう、えっちしてるのと変わらない……♡♡♡

「あっ♡ ああっ♡ へんなのきちゃう♡ ぐううう……♡♡♡♡」

「うん♡ うん♡ きちやうねえ♡ 声、どんどんかわいくなってきたあ♡」

「やあっ♡ きいちゃやだあ♡ あっ、ぐうっ……♡ こ、こえっ♡ へんだからあっ♡」

「えー？ こんなにかわいいのに？ ふふ、じゃあキスしておくち我慢させてあげるね」

ちゅっ、ちゅるっ♡ じゅる、んちゅ、んちゅ♡♡

呼吸もまともにできないほど舌がぐちゃぐちゃに絡めとられる。声、ぜんぶ飲み込まれるみたい……♡ キスとおまんこの両方に同時に快感が押し寄せて、限界がどんどん近くなる。

ビクッ♡ ビクンッビクンッビクビクッ♡♡♡

(ぐんんっ……♡ ひゃっ、ひっ……やあんあっ……もう、イっちゃ……♡ あ……♡)

自分からおちんちに擦り付けてイっちゃった……♡ 引かれてたらどうしよう……♡ 脱力しきった体勢から湊人さんを見上げると。息が止まりそうになるくらい、熱くて甘くて、俺は今えっちなことを考えてますよって視線が、私に注がれていた。

「イっちゃったときのお顔、すっごくかわいい……♡ 大丈夫？ 体、変じゃない？」

「あ……うん……♡ きもちよかったあ……♡」

「ならよかったあ——なら、もっと続き、していいよね？」

「えっ、ちよっ、待っ——ふああああ♡」

くっつき合ったままのおちんちんとおまんこの間に湊人さんが手を差し込む。下着の上から敏感になったクリトリスをそとなぞられ、体がびくんと跳ねた。

イッたばかりの油断しきっているおまんこを触られるのはとっても辛いのに……♡ 体が気持ちよくなるための準備を再開しちゃう……♡

「下着……すごいことになってる。俺のせい、だよな？ ごめんね……♡」

濡れそぼった下着越しに、とん……♡ と軽くタップされると、それだけでのけぞるくらい気持ち良くて、おまんこがひくひく♡ きゅんきゅん♡ えっちに疼きはじめる……♡

「ねえ、自分の腰へコでとんとーん♡ つてするのと、俺のちんぽと一緒にぐりぐりい♡ つてするの、どっちがよかった？」

「あっ♡ どっちも♡ どっちもすき♡」
「どっちもなんだ？」

「うん♡ うん♡ ぜんぶっ♡ きもちよかったの♡♡♡」

「かわいくお返事できてえらいねえ——じゃあ両方してあげる♡」

とんっ♡　ぐりぐりぐりぐりぐりぐりい♡　くにくにくにくにくにくにくに♡

パンツの上から素早く叩かれたかと思えば、押さえつけた指先がクリトリスをこね回すように左右にゆっくりと動きはじめる。私のクリ、遊ばれちゃってる♡♡♡

「ひゃあっ♡♡　や、やああっ♡」

「本当に好きなんだね、こーこ♡　かわいいねえ♡」

そして、とどめと言わんばかりに、湊人さんは私の腰を掴んでいる方の手をぶるぶる震わせはじめた。他の動きと一緒にされると、頭が一気にへんになる……♡

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるっ♡

とんっ♡　くーにくーにくーにぐりぐりぐりいっ♡　とんとんっ♡　ぐりい♡　くーにくーにくにくにくにくに♡　とんとん♡

次にどの刺激がどこから来るのかまったくわからない。悲鳴のような喘ぎ声が自分でも全然止められなくなる……♡

「ああーっ♡ やだっ、やだあーっ!! これっ、つよすぎだからああーっ♡♡」

「えっ、やだった？ こんなに気持ちよさそうなのにな？」

「きもちよくないいーっ♡ こわっ、こわいのおっ♡ すぐいっちゃうっ♡ あっ♡ また
いっちゃうからあああっっ♡♡♡」

「ごめんね、今すぐ止めるから」

ピタリ。湊さんがすべての動きを止める。

あんなに気持ちよかったのに。あと少しでイけそうだったのに。おまんこが、ぽつんと置き去りにされたみたいに切なくひくつく。

「大丈夫、もう怖いことはしないからね。今日はもうおしまいにしよっか」

背中を撫でる指先は優しく私をなだめようとしてくれているけど、でも私の体の奥は疼いたまま収まりそうにない。恥ずかしいのに、腰が勝手にゆらゆら動き出す。

へこお……♡　へこお……♡♡

「……い、いや……やだ……っ、やめないでえ……っ」

見せつけるように足を開いて、腰を振って。おちんちんにおねだりしてるみたいな甘えた声を出す。私の恥ずかしい動きを見つめる湊さんの口元は、ゆるゆるに緩んでいた。

「ええー？　気持ちよくなかったし、怖いんじゃないの？」

「あ……ちがう♡　ほんとはいきたいのお♡　ぶるぶるきもちよすぎて、こわいっていつちやつたのお♡　ごめんなさい♡　ぶるぶるぐりぐりすき♡　いかせてえ♡　おまんこさわってええ♡」

「そうなんだね……でも、『やめてえ♡♡』って言われたら、止めなきゃって俺は思うよ」

優しく唇が重ねられる。湊さんの指が下着越しのクリトリスにそつと触れると、待ち望んでいた刺激に体が震えた。

「あ……ああ……♡ やだあ……♡ やめないでえ……♡」

「うん、うん♡ やめないように頑張るね。だから明梨ちゃんも、『やだ』とか『怖い』じゃなくて、『もっとしてえ♡』っていっぱい教えて……ねっ！」

ぬちゅぬちゅぬちゅ♡ ぴちやぴちや♡ ぬりゅぬりゅ♡ ぬちゅぬちゅ♡

下着の縁から差し込まれた指が、クリトリスを押し上げて、ぶるぶると揺らしてくる。

さっきのパンツ越しで触られるよりもずっと激しくて、あっという間にイキそうになる……♡

「やつ、やだやだっ♡ すぐ、いっちゃうっ♡♡」

「ほんと？ 明梨ちゃん、クリ押し潰してブルブルするの好きだもんね♡♡ じゃあ、イきたいときは、やだやだじゃなくてなんて言うんだっけ？」

「あ……っ♡ きもちいい、きもちいいですうっ♡♡ おまんこきもちいいっ♡♡ みんやとさ
んっ♡♡ きもちいですうう♡♡♡♡ ばかsekudashyaiいゝゝっ♡♡♡♡♡♡」
「よくできました♡♡ じゃあイかせてあげる♡」

一度寸止めされたぶんだけ身体は焦れて、感度が何倍にも跳ね上がっていた。

ぷにゅっ♡ と突き上げられたクリトリスをぶるぶる震わされると、あっという間にまたイ
きそうになる……♡♡

ぶるぶるぶるぶる♡ くちゅくりゅ、ちゅくちゅく♡ ぬちぬち♡ ぐりいゝゝ♡♡

「ぐくぐくぐくぐくっ♡♡♡ またばっちやううううゝゝっ♡♡♡♡」

「ふふ、気持ちよくなるの、上手だね。いってもいいよ。いこっか？ いっちやお……♡」

甘やかす声に背中を押されるみたいに、びくっ、びくんっ……♡ 全身が跳ね上がる。視界が
ぐにやぐにやと揺れて、頭、気持ちよくなることしか考えられない……♡

「んっ♡ おあああっ♡♡ ばっちゃ~~~~っ、っ♡♡♡♡♡」

脚をぴーんっ♡ と突っ張らせ、喉の奥から獣みたいな声をしぼり出し、私はまた……またイっちゃった……♡

「どう？ ちゃんとイけた？」

「はあ……んっ……♡ はあ……♡♡ いきましたあ……♡ に、にかいめえ……♡」

「あはは、教えてくれて嬉しいな。——まだ終わりじゃないけど、大丈夫？ 今日はおしまいにした方がいい？」

「っ……♡ だ、だめえっ！ まだ、まだ、ほしい……♡ えっちするのお♡♡♡♡」

慌てて湊さんの胸にしがみつки、腰を振って情けなく懇願する。

もう二回もイッたのに。いつものオナニーなら余裕で満足しているのに。全然足りない……♡ もっと気持ちよくなりたい……♡

さらなる快感を求めて腰をくねらせる私の耳元で、湊さんはえっちに微笑む。

「うん……♡　じゃあこのあとも、いっぱい、いーっぱい……ふやふやにしてあげる♡」

怖いくらい優しい笑顔に見つめられて、私のおまんこはきゅんきゅん♡とひくつき続けた。